助六（すけろく）

天保十年（１８３９年）三月

作詞　三世　桜田　治助
作曲　十世　杵屋　六左衛門

［前弾］〈本調子〉

咲匂ふ（さきにほ）　桜と人に宵（よい）の口、野暮（やぼ）は揉（も）まれて粋（すい）となる、
此処（ここ）を浮世の仲の町、戀（こい）に焦がれて助六が
傘さして、濡（ぬ）れた廓（くるわ）の夜の雨　店清掻（みせすがき）きに声添（こえそ）ふる、
鐘は上野か浅草に、其名（そのな）も伊達（だて）な花川戸（はなかわど）
此鉢巻（このはちまき）の紫（むらさき）は、由縁（ゆかり）ぞかゝる藤波（ふじなみ）の、
洗ふて千代の色まさる、松の刷毛先（はけさき）透（すき）通（とお）る額（びたい）、
堤（つつみ）八丁衣文坂（えもんざか）　通ひ馴れたる塗鼻緒（ぬりばなお）、
一つ印籠（いんろう）一つ前、二重廻（ふたえまわ）りの雲の帯（おび）、
さした尺八（しゃくはち）　鮫鞘（さめざや）は、是御存（これごぞん）じの出立（でだちばえ）栄

〈三下り〉

急くな急きやるなさよえ（せ　せ）、浮世はな車（くるま）さよえ
廻（めぐ）る月日（つきひ）が縁（えん）となる
戀の夜桜（よざくら）　浮気で通（かよ）ふ　間夫（まぶ）の名取（なとり）の通（とお）り者、
戀の夜桜　浮気で通ふ　間夫の名取の通り者、
喧嘩（けんか）仕かけや　色仕掛、力づくなら何手管（なにてくだ）なら、
流儀（りゅうぎ）〳〵で向ふづら、たゞは通さぬ大門（おおもん）を
また潜（くぐ）るとは命がけ　土手節（どてぶし）やめよ編笠（あみがさ）を
取って投げるは曲（きょく）がない、蹴込（けこん）で見せう家形船（やかたぶね）、
こりや又　何のこつた江戸の花
富士と筑波の山間（やまあい）の、袖（そで）なりゆかし　君（きみ）ゆかし
しんぞ命（いのち）を揚巻（あげまき）の、是（これ）助六が前わたり、
風情（ふぜい）なりける次第（しだい）なり

令和七年二月二十八日

大中臣正比呂　記